

福島から原子力に関わるすべての人へのメッセージ

星 北斗

Hoshi Hokuto

(公益財団法人星総合病院理事長)



原子力爆弾を持った北朝鮮と米国の対立は一触即発の事態となっており、隣国の日本として傍観は許されない状況である。また、我が国を代表する企業であったはずの東芝が、原子力発電所に関連する問題により解体され国外に売却されようとしている。一方で、国内では原子力発電所の再稼働問題に揺れており、こちらも予断を許さない状況となっている。それでも直接関係が無いと決めつける多くの国民が、自らの関心をそこに持とうとしないのは何故だろうか。

築地市場の豊洲への移転問題は、科学的な安全問題であったはずのものを安心の問題にすり替えてしまった途端に、出口のない議論へと沈んでいくことになった。この国においては、科学的な証明よりも感情論やいわゆる風評によって世論が形作られることが多く、結果として問題の本質を見失うことが繰り返されている。しかし一方で、科学や権威、あるいは経験に頼る危うさをも認識すべきである。

福島における風評被害は、未だに甚大である。海産物や農産物はもとより福島という地域全体に向けられる視線は、残念ながら厳しさを増しているように感じる。ある種の想定と科学とに基づいてはいるのだろうが、所詮は「人間が定めた」安全基準が、原発再稼働の根拠として安全という側面から説明されようとしているが、地域住民はそれを安心して換えることができないフラストレーションの中にあるのではないだろうか。即時全面停止はナンセンスだと思うし、原子力の無秩序な利用拡大もあり得ないだろう。経済的な損得や地球温暖化問題から考えれば、せめて既存施設の再稼働は不可欠なものだと考えるかもしれない。原発から遠く離れ、発電された電力の恩恵を受けるだけの東京や大都市から見れば尚更なのだろう。

現在、廃炉作業や原発の信頼回復のために様々な立場で対応に当てられている関係者には敬意を払いたい。しかしながら福島第一原発は、当時の安全基準には合致していたのだ。発電所なのに電気が無いために爆発するなんて笑い話にもならない。自衛隊のヘリから投下された海水が、むなしく霧状に消える映像は2度と見たくないし、理不尽な差別を受ける子供たちもいじめの子供のどちらも存在して欲しくない。

安全基準は一定の想定とそれに基づいて決められることも分かっている。でも、事故後に多用された「未曾有」や「想定外」は聞き飽きた。要は、安全に絶対は無いか、その上で不断の見直しをすること、自然に対する畏敬の念を持つこと、人間は失敗や間違いを犯すことを知ること、事なかれ主義のもたらす危うさに対する強い意志決定のしくみ。これらを持ち合わせない者に原子力を扱わせてはいけない、そう思うのは僕だけではないはずだ。

再稼働を目指す電力会社のコマーシャルが福島県内で放送されることはないが、旅先で見かける映像に登場する実直そうな社員たち。この人たちの努力を無にしないためにも、関係者は覚悟を持って臨んでほしい。厳しいようだが当時の東電にはその資格は無かったのだと思う。